
合葬

杜若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

合葬

【コード】

N8032B

【作者名】

杜若

【あらすじ】

愛するものを手に入れようとした時女性はどんな手段でもとるものです

（前書き）

創作歴史ものです。すべてフィクションです
その点に注意してお読みください

「……様」

名前を呼ばれ、私は立ち上がった。

首や腕、そして腰に巻かれた玉がしゃらしゃらと涼やかな音を立てた。

鏡を覗き、化粧のできばえを確かめる。

磨きぬかれた銅は、それでも細部までははっきりと写すことはできず私は入ってきた侍女に尋ねた。

「今日の化粧の出来は美しいかしら」

だが、侍女は答えず片袖で顔を覆った。

「……おいたわしゅうございます」

喪に服すものが纏う黒い衣の隙間から、嗚咽交じりの声が漏れる。

おいたわしい？私か？

なぜ？私はうれしくてたまらないのに。今もこらえていなければ声を上げて笑い出しそうだ。

声を出せない私に代わって、体中の玉がなる。

しゃらしゃら、しゃらしゃら。

部屋の外にでると、多くの人々の視線がいつせいに私に注がれる。

が、私が人々を見ると、皆侍女と同じように顔を伏せる。

耳に届くのは押し殺した嗚咽と、「おかわいそうに」という声のみ。

不思議だ。本当に不思議だ。

私は誰に強制されたわけでもなく、自分の望みでこの場に居る。

誰も気付きはしないだろうが、生まれて初めてのことだ。

しゃらしゃら、しゃらしゃら。

玉の音だけが涼しげに、私の後をついていく。

やがて、目の前に現れた陵墓は、草木が生えていないことと

小さな入り口があることを除けば小高い丘そのもの。

ここに私の夫であり、この国の王でもあった人が眠っている

墓を守る兵士が深くうつむいて、私に小さな松明を渡してくれた。微笑んでそれを受け取り、一瞬の躊躇もなく私は入り口に足を踏み入れた。

墓の中は真っ白な石が敷き詰められ、女官や宮廷の庭の様子が描かれている。

あの人は寂しがりやだった。死して尚、何もない場所に居ることが耐えられないのだろう。

重い音が背後から響く。振り返らなくても私には分かる。

あれは、入り口がふさがれる音。不届きな輩にあらされることがないように

重い石で。もちろん私が中からどんなに力をこめても、あけることはできない。

石に映る私の影がどんどん細くなり、ついに消えた。と、同時にたいまつので出来た薄い影がユラユラと立ち上がった。

王が眠る部屋まで、もう少し歩かねばならない。しやらしやら。しやらしやら。

玉をならしながら、私は歩をすすめる。

「王はたくさんの妃をもつものです」

幼い頃から王の妃となるべく育てられ、父もまた大勢の妃をもっていたから

十分に理解していたはずだった。

だが、実際に自分が妃になると、大勢の中の一人であることが私には耐えられなかった。

母はどうして、ちがう妃のもとへ行く父を笑顔で送り出せたのだろう。

「女がたくさんの玉を持ちたがるのと同じことですよ」

と侍女は笑ったが、私は玉ではない。玉ならば砕けようと捨てようと何もいわない。

だが、私は違う。

だから、王の杯に毒を入れた。

これ以上、違う妃のもとに通わぬように、新しい女が目に入らぬように

美しい娘を、口説かぬように。

王からすべてを奪ったのだ。

無論、奪っただけではない。代わりに私はこの身を差し出すのだ。

王と共に死者の国へと旅立つ。

四神に囲まれ、王は永遠の眠りについていた。

部屋は広く、棺は置かれていても十分に余裕がある。

私は玉を揺らしながら棺に手をかけた。

ああ、王君。ようやく私だけのものになりました。

深く、深く笑いながら、わたしは大君の隣に身を横たえた。

石棺と死者は冷たい。だが、

一人寝の床の冷たさに比べれば、水とお湯ほどに違う。

もう、離しません。どこまでも共に。

動かぬ体を抱き、青ざめた唇に私は自らの唇を重ねた。

1988年 藤ノ木古墳より出土した石棺が考古学者らの手によって開封された

埋葬されていたのは、男女2名。尚、日本の墳墓で、男女が同じ棺の中に入っていた例はこれ一つであり、

日本考古学史上 最大の発見の一つとされている

注意 この話はすべてフィクションです

(後書き)

よろしければ感想を聞かせてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8032b/>

合葬

2010年10月9日07時21分発行